

教室(診療科)紹介 (79)

佐倉病院小児科学講座の現況

小児科学講座 (佐倉)

教授：館野昭彦

准教授：本山 治 (医局長)

昨年9月、佐倉病院開院20周年と同時に佐倉病院小児科学講座も無事20周年を迎えた。開設から約10年間は、小屋二六教授の下、基礎固めの時期であった。その後、主任教授の小屋二六教授が退職され、館野昭彦が部長に昇格し、今日まで小児科学講座運営にあたっている。開設当初からのスタッフは私と沢田 健医師のみとなっていたが、ともに東邦大学小児科学中山健太郎教授の門下生であり、何かにつけ良き当時を思い出しながら、方向性を探ってきたというのが本音である。大学付属病院小児科としては、少ない人数で運営せざるを得ないのが現状だが、第1小児科学講座から有能なスタッフを派遣あるいはローテイトして頂き、地域住民に対して適切な小児科診療を提供してきた。

この10年間に、日本小児科学会グランドデザインが示され、大学病院および総合病院のあり方、1~3次小児救急医療体制の取り組み等が検討された。当小児科においては、小さいユニットながらも特色ある小児科学教室を目指すため、いち早く neonatal intensive care unit (NICU) 併設型地域小児科中核センターへの方向性を決定し、整備に入った。最小単位でありながらも、沢田医師を中心とした新生児学、私を中心とした小児神経学を中核として、教室運営を考え、一般小児神経学診療・研究のみならず、周産期から成人に成長するまで継続した医療を提供してきた。小児科診療は、スタッフが少なくともほぼ全臓器にわたる診療が必要であり、専門外来として、准教授の本山 治医師による腎・泌尿器外来、非常勤医師によるアレルギー外来等の他、循環器外来(第1小児科学講座 松裏准教授・中山講師)、代謝・内分泌外来(第1小児科学講座 佐藤准教授)等を設置し、地域における小児科診療に貢献して



医局員の集合写真

前列左から、沢田新生児室長、館野部長、本山医局長
後列左から、藤田研修医、秋葉医師、高山医師、東山臨床心理士、玉置医師



地域周産期母子医療センター。9床稼働中の neonatal intensive care unit (NICU) 風景

きたという自負がある。さらに、東山ふき子臨床心理士による患児および家族の評価ならびに診療に対するサポートは、私達医師の行う診療を受療サイドからも受け入れやすい状態を可能にし、円滑な診療に役立っている。

研究活動としては臨床研究が中心であり、小児神経および心身症領域、本山准教授を中心とした腎・泌尿器疾患、沢田室長を中心とした新生児疾患等に関する学会活動、論文作成を行ってきたが、十分な内容とは言えない。新生児領域も呼吸・循環といった急性期治療から、神経学的予後を改善すべく、新生児神経学ならびにその経過観察が重要になってきたが、わが国全体をみても新生児神経学に関してはほとんど手つかずの状態である。当教室においては、

今後この分野にも精力的に研究を進めていく予定である。さらに、この春からスタッフが加わり、感染症および小児肝疾患に関する基礎的研究等の開始も見込まれる。

2010年4月から、当小児科による地域周産期母子医療センターのNICUが6床から9床に増床され、growing care unit (GCU)の6床と併せて、15床のユニットになった。描いていたNICU併設型地域中核センターとしての機能を十分に発揮することができるようになったが、ご指導・ご協力下さった現東邦大学理事長炭山嘉伸先生と東邦大学学長青木継稔先生に深謝申し上げます。このユニット

の存在は大きく、佐倉病院の中でも公的に評価できる1つと言えられる。この20年間を振り返ると、小児科救急をすべて行ってきた時代から、二次輪番システムを構築し救急医療体制を大きく変えた時代へと、当小児科は地域においてリーダーシップを発揮してきた。今後も小さくとも特色のある小児科学講座の運営を目指し、医局員一同頑張り走り続けたいと思っている。

(教授：舘野昭彦)